

「河鍋暁斎の底力」下絵・画稿・席画から見る“生の筆遣”

東京ステーションギャラリー 2020. 11. 28～2021. 02. 07 展示替えあり

絵師「河鍋暁斎（きょうさい）」は幕末から明治にかけて活躍し、狩野派に親しみつつも希有な形態把握能力で独特の作風の日本画や浮世絵を手掛けた。

本展は、完成度が高い一方で弟子が入ることもあった本画の作品ではなく、下絵や画稿などから画伯の卓越した画伯の”生の筆遣い“を紹介している。

席画とは、宴会の席などで客を前にして、客が注文する多種多様な画題を下絵も無しに短時間で描かれる作品で、絵師の実力を如実に表すものである。



河鍋暁斎 《日本武尊の熊退治 下絵》 1879（明治12）年 左

本画にはない独自の魅力である“筆の勢い”がある作品で、絵筆を執った画伯の頭の中に溢れる様々なイメージが一気にぶつけられたような画面は、アイデアを的確に形にしてゆく手の素早い動きを生き生きと伝えている。

河鍋暁斎 《女人群像 下絵》一面 紙本墨画 1871（明治4）年 中

画伯の和紙を貼り重ねて入念に訂正を施した、まさしく「日本女人群像」を描いた下絵で、髪型自体は唐輪髻、兵庫髻、勝山髻、島田髻につぶし島田まで、近世の始まりから後期に至るまでの各時代の女性が描かれているととても迫力のある下絵である。

河鍋暁斎 《猫又と狸》 鶏獣戯画画稿 一面紙本淡彩 1871（明治4）年 右

画伯は、動物を描くために下絵として数多くの作品（画稿）を残しているが、本作はその一枚で、動物たちの踊る姿が描かれている。赤い上着の猫は、尻尾の先が二股に分れていることから「妖怪の猫又」とわかる。

隣で踊る狸も、藻を頭にのせて今まさに化けようとしていて、その前には草で編んだ団扇を持って狐が踊っているが、狐と狸は互いに化かし合うのではなく、協力して化け猫のために音頭をとっているようである。